０１・３０日前

本編トラック０１の、三十日前。

とある年の春。十六時ごろ。
場所は大陸西部。
天気は晴れ。気温は二十度程度。

場所は、とある都市に接する森の入り口。
主人公は今、姉の『ガラテア』『ルミナ』『ミーシャ』の三人と共に歩いている。
主人公は、四人姉妹の末っ子なのだ。

ＳＥ１　森の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【０―５秒ほど流してＳＥ２】
【その後、音量が小さくなる】

【トラック終了まで流し続ける】

SE2　主人公達の足音

【最初から最後まで流す】

しかし四人は、ここでふと立ち止まる。
主人公はこのまま先へ進むが、姉達は一緒に行けないからだ。
四人は全員、とある街の騎士団に所属する騎士だ。
普段はそれぞれ、街の警護に当たっている。
逆に言えば、『街の騎士団』という職業の性質上、長期間街から離れて慣れて過ごす事は基本的にない。
市民を守る事と、街の近隣で起こる問題を解決する事。
それらが、四人の主な仕事だからだ。

だが、今回は違う。
主人公は今日から当面のあいだ、街を離れて、遠くの都市まで調査へ行く。
姉妹のうち、主人公だけが、特別な任務を命じられたからだ。
つまり姉達は今日、しばらく会えなくなる主人公を、見送りに来てくれたのである。

〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
落ち着いたトーンでありつつも、どこか緊張感のある声で。
いかにも『お堅い、融通のきかない女性騎士』という感じで】
……では、ここでしばらくお別れだな」

ここでふと、長女のガラテアが主人公に声をかける。
彼女は主人公に、今一度注意しておきたい事があるのだ。

〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
真面目に厳しく、強く言い聞かせるような口調で。
ガラテアは主人公の姉で、四姉妹の長女だ。
また、四姉妹が所属する騎士団においても、最も上の立場である。
そのため、騎士としても、姉としても主人公に厳しい。
もちろん主人公の事は、大切に想っている。
だが、不器用な性格ゆえに、いつも必要以上に厳しい言い方になってしまいがちである】

最後にもう一度言っておくが。
【『いいか』と『決して』を強調して。
この二つを強調する事によって、特に厳しい人物として聞こえるように話す】
いいか。
作戦遂行までは、決しておかしな気を起こすなよ」

〈主人公〉
「はい……」

主人公、思わず縮こまりながら、姉の言葉に静かに頷く。
ガラテアがこの話をするのは、もう何度目かわからない。
つまりその位、今回の任務は危険なのだ。

今回主人公に課せられたのは、単独での潜入調査だ。
主人公はこれから、商人『イザベラ』の屋敷に雇われ、表向きはメイドとして働きながら、スパイとしてイザベラの悪事の証拠をつかむ。
そして、これに成功次第、姉達に報告。
屋敷で騎士団の到着を待ってから、イザベラを捕らえ、同時に屋敷に奴隷として囚われ

ている、亜人の少女達を救出する。
このような計画を、今、騎士団全体で進めているのだ。

本来なら、この件は主人公達の管轄外だ。
少なくとも、イザベラの住む都市の騎士団に協力を仰ぎたい事件である。
しかし、その騎士団にはイザベラの息がかかっており、何を言っても『証拠を出せ』の一点張りで頼りにならない。
おまけに連れ去られた亜人の少女達の中には、主人公達の街の市民が混じっている疑いもあるのだった。
つまり主人公達は、この件を野放しにはできない。
だが、証拠をつかむまでは、おおっぴらに動く事もできない。
そこで常日頃『騎士団一、騎士っぽくない』『目立たないし気配もない』『もはや、生まれついての隠密』と評されている主人公が、一人で調査に向かう事になったのである。
主人公の騎士人生においても、騎士団にとっても、非常に重要かつ、時間をかけた任務になる。
だから、ガラテアも心配しているのだ。

〈ガラテア〉

「【主人公がこれから調査を行う人物『イザベラ』について話す。
イザベラは商人であり、魔女ではない。
だが、その筋の怪しい人間達と通じており、多数のマジックアイテムや、人心を操る危険な薬物を所持している。
なので、ガラテアはイザベラを非常に警戒し、また、軽蔑している。
ガラテアは騎士としては非常に優秀だが、魔法関連の知識についてはからっきしで、人一倍苦手意識がある。それもあって、とにかくイザベラを嫌っているので】
イザベラはおかしな薬物を使う、悪魔のような女だ。
お前一人では、到底太刀打ちできん。
【特に強く念を押す。
ガラテアは『これまでイザベラが行ってきた非人道的行為の数々からして、潜入期間中は、主人公にとって、とても許せないような事が度々起きるだろう』と考えている。
しかしそのような事態に直面しても『どうか耐えてほしい』『その位、イザベラは脅威である』と思っているので】
途中で何が起きたとしても。
絶対に私達の到着を待つように」

〈主人公〉

「……」

主人公、ガラテアの強い口調に再び頷きつつも、何だか心が沈んでしまう。
もちろん、イザベラが恐ろしい存在である事はわかっている。
しかし、こうも念を押されると『自分はガラテアにとって、それほどまでに頼りなく、信用ならない存在なのだろうか』と、しゅんとした気持ちになってしまうのだ。
ガラテアは主人公をいつも想っているし、それは主人公ももちろん同じだ。
だが、つい威圧的な態度を取ってしまうガラテアと、気弱な主人公は相性が悪い。
それゆえに、姉妹関係は今一つなのだった。

〈ルミナ〉
「【主人公に話しかけている。
とても心配そうに、優しく。
おっとりと間延びした口調で。
いかにも『優しく過保護なお姉ちゃん』という感じで。
ルミナは主人公の姉で、四姉妹の次女である。
おっとりしているが、戦闘能力は姉妹で一番上。
騎士団内での地位も、ガラテアとほとんど変わらない、実力派の騎士だ。

そんなルミナは、ガラテアとは対照的に、とにかく主人公に甘い。
今回の任務についても『主人公には向いていないのではないか』と非常に心配しており、できれば他の誰かに代わってほしいと思っている。
しかし、最終的には結局主人公に任せる事となった。
なので、この件について内心とても申し訳なく思っている。
同時に、腕っぷしが強いばかりで、作戦の決定権がない無力な自分を、歯がゆく感じていた。
だが、態度にはみじんも出さない】
そうよ～？」

すると、今度は次女のルミナが話し始める。
主人公がすっかりしょげているのに気づいて、助け舟を出してくれたのだ。

〈ルミナ〉
「【おっとりと、主人公の気持ちを推測して、諭すように話す。
『我慢。我慢よ～？』を少し強調して。
しかしこの言葉は、実際は、自分自身に言い聞かせているふしがある】
潜入期間中は、我慢。我慢よ～？

【イザベラの屋敷に囚われている、亜人の少女達について触れる。
『主人公の性格上、彼女たちの安否が最も気になるところだろう』と思っているので】
亜人ちゃん達を早く助けたい気持ちは、みぃんな一緒。
でもぉ。
その為には、あなたがちゃんと情報を集める事と、私達騎士団の連携が必要なの～。
【優しく、諭すように】
だから。お姉ちゃん達の言う事、ちゃんと聞いてねぇ～？
【ひときわ心配そうに。
ルミナが『今回の任務は、主人公に向いていない』と判断した理由は、主に『主人公が優しすぎる事』が原因なので】
あなたはとぉっても優しいからぁ……。
亜人ちゃん達に感情移入しすぎないか、お姉ちゃん心配なのぉ……」

〈主人公〉
「……」

しかし、ルミナのこれは逆効果に終わる。
今の主人公は、すっかり落ち込んでいた。そのせいで、素直にルミナの優しさを受け取

る事ができない。
それどころか『ルミナもガラテア同様、自分を頼りない妹だと認識しているようだ』と感じてしまい、ますます声が出なくなってしまったのだ。
このように主人公は、気が弱く、とてもネガティヴな性格だ。
いつも『なぜ、もう少し物事を前向きに、明るく捉えられないのだろう』と考えてはますますへこんでしまい、自分とは対照的な三人目の姉を、まぶしく感じる。そんな事ばかり繰り返しているのだ。
だが主人公とて、いつまでもそんな自分でいたくはない。
この悪循環から抜け出し、自立するためにも、主人公は今回の任務を引き受けたのだが……。

〈ミーシャ〉
「【ガラテアとルミナに話しかけている。
明るく、その場を仲裁するような口調で。
姉達が、主人公を心配するあまり、かえって主人公を追い詰めてしまっているので。
ミーシャは主人公の姉で、四姉妹の三女である。
しかし、主人公とは年が近いのもあり、姉というよりは、友人のような関係だ。
ミーシャは、戦闘能力はそこそこだが、要領がよく、器用。

なので、自分とは真逆の、不器用で、いつも貧乏くじを引かされている主人公を、いつも心配している。
さらにルミナ同様、今回の任務については『主人公には向いていない』と思っており『自分が代わりたい』と進言もした。
だが承認されず、主人公も任務に前向きなので、口をはさめなくなってしまった。
それゆえに『もはやできる事は、主人公を鼓舞して成功率を少しでも上げつつ、大急ぎでサポートに回れる状況にするしかない』と思っている。
なので、少しでも主人公を鼓舞したい】
まぁまぁ。姉さん達。
【明るくおどけた口調で。その場を和ませようとしている。
『こいつ』とは主人公の事】
こいつは潜入のプロですよ？
【主人公の良いところを述べる。
主人公を鼓舞したいので】
辛抱強いし、約束はちゃんと守る。
今回もこれまで通り、きっちり仕事してくれるって！」

SE3　ミーシャが、主人公の肩に手を置く音

【最初から最後まで流す】

だが、この状況から主人公を救ってくれたのは、やはり三人目の姉だった。
ミーシャは主人公の肩をぽん、ぽんと優しく叩くと、にかっと微笑む。
それから同意を促し、主人公の緊張を解こうとしてくれた。

〈ミーシャ〉
「【主人公に話しかけている。
明るく、同意を促す。
『ねっ？』と『そうでしょ？』の間に少し間をあける】
ねっ？　そうでしょ？」

〈主人公〉
「……！」

これによって、主人公の顔は、少しだけ明るくほぐれ、思わず泣きそうになる。
この通り、主人公はいつもミーシャに助けられてばかりだ。
だが、それでもミーシャは主人公を評価し、励ましてくれる。

彼女のためにも、この任務を成功させたい。そんな気持ちが沸いてくる。

〈主人公〉
「……うん！
わたし、頑張るよ。
必ず、この任務を成功させます……！」

〈ガラテア〉
「【ミーシャに同意する。
少し声と態度が優しくなる。
ミーシャの言葉に毒気を抜かれ、また、主人公の言葉に少し安心感を覚えたので。
それから『さすがに、主人公にきつく言いすぎてしまった』『そんな自分にミーシャが気を遣って、その場を和ませようとしてくれているようだ』と反省したので】
……ふむ。そうだな。
ミーシャの言う通りかもしれんな」

二人のやり取りを受けて、ガラテアの声も少し柔らかくなる。
彼女もまた、ミーシャの気遣いを理解したのだろう。

さらにこれに、ルミナも続く。

〈ルミナ〉

「【主人公に話しかけている。
おっとりと、でも、申し訳なさそうに。
先ほどの発言について詫びつつ、補足する。
ガラテア同様『ミーシャが気を遣って、その場を和ませようとしてくれているようだ』と理解したので。
また『確かに主人公の事を、心配しすぎてしまったかもしれない』と、反省したので】
ごめんね～？
お姉ちゃん達、こんなに長くあなたと離れるの、初めてだから～。
私やミーシャはもちろん。
ガラテアお姉ちゃんも、ほんとは心配で心配でしょうがないのよ～？」

そしてそこへ、この爆弾発言だ。
ガラテアは途端にあわあわと慌て出し、妹の暴露について、必死に言い訳し始める。

〈ガラテア〉

「【ルミナに話しかけている。
少し慌てて言い訳をする。
ルミナによって、恥ずかしい事実を暴露されたので】
お。おい、やめろ、ルミナ。
私はただ、任務の成功を考えてだな」

〈ルミナ〉
「【三人に話しかけている。
おっとり、にこにこと嬉しそうに。
でも、ずけずけと。
あっさり、ガラテアが秘密にしたいだろう事をばらす。
『この人』とはガラテアの事】
そんな事言って～。
昨日もこの人、ずっと『あいつは大丈夫だろうか。本当にできるのだろうか』って。
ずっとぶつぶつ心配してたのよ～？」

こうしてその場の雰囲気は、一気にほぐれていった。
これから重大任務が始まる事を一瞬忘れてしまいそうになるほど、和やかな空気になっ

て行く。

〈ガラテア〉
「【ルミナに話しかけている。
少し慌てて、照れた様子で。
恥ずかしい事実を暴露されたので】
おい！　やめろと言っただろ！」

〈主人公〉
「……ふふっ。ふふふふ……！」

〈ミーシャ〉
「【明るく嬉しそうに。
すっかり四人の雰囲気が良くなったので安心している】
あはははっ！　うちらほ～んと❤　仲良し姉妹～♪」

〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。

少し照れた様子で。
真面目な話をしていたのに、すっかり妹達に茶化されてしまったので。
だが、それを悪い事だとは思っていない。むしろ『助かった』と思っている。
なので、口調は変わらず、柔らかい】
全く……」

だが、いつまでも笑ってはいられない。
ガラテアは会話がひと段落したところで主人公に向き直り、それから、改めてこう言った。

〈ガラテア〉
「【主人公に話しかけている。
軽く咳払いしてから話す。
気を取り直して、真面目な話をしたいので。
だが、口調は先ほどよりも柔らかい】
とにかく。今回の作戦はお前が要（かなめ）だ。
我が騎士団の威信をかけて。
【少し考えて、言い直す。

自分達は騎士だから、亜人の少女達を助けに行く訳ではないので。
一人の人間として亜人の少女達が心配だから、この計画を立てているので】
いや、この国に生きる一人の人間として。
イザベラの屋敷に捕らわれた亜人の少女達を、必ずや全員救おう。
【主人公に話しかけている。
真面目なトーンでありつつ、優しい声で】
……では、行ってこい。健闘を祈る」

〈主人公〉
「……はい！」

大きく返事をした主人公に、姉達が次々と声をかける。
今回の任務には、どれ位の時間がかかるだろう。
それはまだわからないが、少なくとも再会の時、以前よりも成長していたいと、主人公は思った。

〈ルミナ〉
「【主人公に話しかけている。

おっとりと優しく。だが、少し心配そうに】
気を付けてね～？
帰ったらお姉ちゃんと、い～っぱい遊ぼうね～？」

〈ミーシャ〉
「【主人公に話しかけている。
明るく爽やかに。
まるで『今回の任務なんて、大した事はない』かのように接する事で、主人公の精神的負担を軽くしようとしている】
行ってらっしゃい！　頼りにしてるからねっ。
今回もちゃちゃ～っとやっちゃって❤
ねっ❤」

〈主人公〉
「……うん！　行ってきます！」

三人の言葉に背中を押され、主人公は歩き出す。
だんだん早歩きになり、やがて走り出し、森の中へ消えていく。

その後姿を、姉達は、完全に見えなくなるまで見つめている。

SE4　主人公の足音
【最初から最後まで流す】
【2回繰り返して流す】
【SE2と同じ音】
【だんだん速度が速くなる】
【さらに、フェードアウトしていく】

ここでフェードアウトして終了。